

2016 年度日本建築学会北陸支部大会行事

学生による語り合いのシンポジオン

学内外における学生主体の建築活動（教育・研究・実践）

シンポジオン世話人会

## 1. 概要

シンポジオンでは、学生諸君の精力的な活動について話題提供の場を設け、語り合いと自由討議により参加者全員で交流することを目的としている。今回のシンポジオンは 2 部構成とし、前半は話題提供として 5 チーム（4 大学 1 高専）の学生たちによる活動プレゼンテーション、後半は会場全体での自由な語り合いと交流がなされた。

■日時：2016 年 7 月 24 日（日）13:00～15:30

■場所：福井大学文京キャンパス 111M 講義室

■参加者：30 名（学生 22 名、教員・一般 8 名）

■タイムテーブル

13:00-13:15 趣旨説明

13:15-14:15 活動プレゼンテーション

14:15-14:30 休憩

14:30-15:15 語り合い、自由討議

15:15-15:30 まとめ

## 2. 話題提供

各チームからは非常に工夫を凝らしたプレゼンがなされ、動画紹介、パネル展示、模型説明など、バラエティ溢れる活動発表となった。以下に報告する。

### 2.1 細呂木プロジェクト

発表者：下中雄一（福井工業大学、下川勇研究室）

細呂木はかつては 5,000 人程の村で、福井県坂井郡金津町と合併した。福井のまちづくりの一環で「細呂木プロジェクト」と題して、地区の活性化を考えたという。

その地区では、体験スポット、コンセプトギャラリー、簡易スーパー、宿泊室を設けた複合的な機能地区を提案されていた。また歴史上の人物として、親鸞、蓮如に加えて地元の名士である多賀谷氏にもスポットを当て、施設外観も含めてプレゼンされていた。



## 2.2 ヴィジュアルプログラミングを活用したあかりオブジェの造形デザインと制作

発表者：廣瀬寛騎（金沢工業大学、下川雄一研究室）

金沢工大では、金沢市片町を中心会場にして月見光路プロジェクトを実施している。このうち、輪島においてもあかりプロジェクトがあり、これに照明器具のデザインで参加されたとのことである。氏はもともと、BIMを研究されており、「コンピューテーショナルデザイン」は動的に3次元の空間造形や、構造的・環境的な視点で造形デザインの検討を進める手法であり、これを利用活用すると種々の形態の生成を行うことを考えて、あかりの容器をデザインしたとのこと。具体的には、低コストのデザインとして、一枚の材をおりたたんで形を作るものであるという。当日は、照明器具をスライドで紹介されていた。

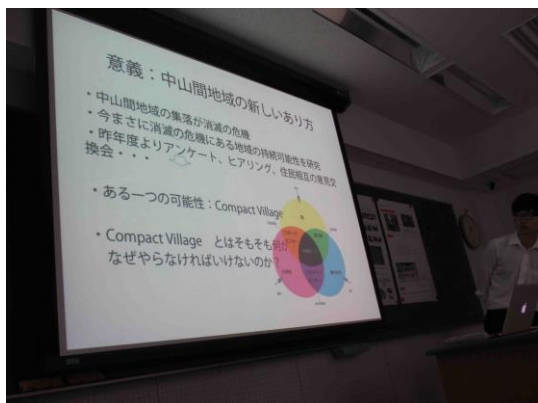


## 2.3 Compact Village in くりから 一中山間地域における新しい住まい方の提案

発表者：池尻謙太（石川工業高等専門学校、熊澤研究室）

当該地域は木曾義仲の源平合戦の遺跡をはじめ多くの文化資産が残る地域であるが、少子高齢化、若者離れにより、集落の維持が難しくなっている。氏は、こうした問題を中山間地域の問題としてとらえ、集落再建の1つの解決案として、「コンパクトビレッジ」構想を提案されていた。すなわち、集落消滅を待つのではなく持続可能性をどう確保するかということで、居住の仕方を中心に教育や生活などの提案について、畳一枚ほどの大き

な模型を持ち込んで熱弁を振るわれていた。



## 2.4 子どもの遊び場と地域の関わり

発表者：玉村知哉、田伏正弥（Fukui Play-Studio 遊房）

「遊房」とは、子どもたちの遊び空間を提供することで生きる力を育む手助けをしている、福井大学学生による学生団体であり、地域民と大学から支援されている。

主な活動は以下のとおりである。

- (1)福井大学横の雑木林にて、プレイパークを2週間に1回実施している。
- (2)汚れ遊びの良さを知ることを目的に、泥んこ祭りを年1回実施している。
- (3)トレインアドベンチャーを通して、地域の大切さを子どもに伝えている。

また、この種の活動では、子どもにかまひ過ぎが多々目立つものであるが、彼らは、以下の遊房六ヶ条を制定し、自らを律して子どもに対処している、とのことである。

- ①子どもも大人も素に戻る。
- ②五感をフルに使い思いのままに動く。
- ③「危ない」「汚い」「うるさい」でよい。
- ④普段できないことにも挑戦する。
- ⑤身の回りについても考える。
- ⑥何事にも「愛」を持つ。

最後に、遊房は遊びを目的に活動しており、地域のコミュニティづくりは地域の子どもの活発化させるはず、と締めくくられた。



## 2.5 知的障害者施設「ハスの実の家」での暮らしと実践

発表者：野田真士（福井大学）、仲村春乃（福井県立大学）

「何においても、自分らしく暮らすことが大事です。」とまず前置きされて、知的障害者施設「ハスの実の家」での活動を報告された。「自分らしい暮らし」の実現のために、選択性のある暮らし方が必要であり、さらには日常的な人とのつながりが大事であることを主張されていた。現在の活動として、民間空き家をグループホームとして活用し、施設利用者が地域のなかで居住している事例を中心に、利用者自身の自立に向けての支援や、地域や社会とのつながるための支援を写真で紹介されていた。



## 3. 語り合い、自由討議

各話題提供者がブースを構え、参加者が各ブースに自由に出向いて語り合うシステムとした。全体で45分間の討議時間を設けていたが、15分間をワンクォーターとし、司会者が15分おきに参加者にたいしてブース移動を呼びかけ、会場全体で積極的な語り合いが進行するように働きかけた。

当日の討議風景を写真で紹介する。







#### 4. 参加者の感想

- 自分は環境系ですが、今回のシンポジオンを通して計画系のことも分かり、よかった。(廣瀬寛騎／金沢工業大学)
- 自分の提案に対して厳しい意見も聞けてよかった。ぜひ他のグループの話も聞きに行きたかった。(池尻謙太／石川工業高等専門学校)
- いろんな問題がつながっていて、多くの方々の思いを知ることができてよかった。(田伏正弥／福井大学)
- 私は社会福祉学科の学生ですが、他の分野のことも知ることができてよかった。自分と共通することが多々あることが分かった。(仲村春乃／福井県立大学)
- 小学生、障害者のまちづくりの概要を知ることができてよかった。(中島／福井工業大学)

#### 5. まとめ

最後に、石川工業高等専門学校の熊澤先生からご挨拶いただいた。「若いときこそ、チャレンジできる。大人になるとチャレンジの機会が少ない。ぜひ、経験を重ねていってください。」と参加した学生諸君を激励された。

文責 野田真士 (シンポジオン世話人会代表)